

第1章 市民による森のカルテづくりのすすめ

1 目的

目的の話をするとお堅い文章となりますが、何をするにも目的は大切なことです。思いどおりに上手くいかなかった時に、「当初の目的は」と振り返った経験は、どなたにも、あるのではないのでしょうか。目的を明確にすることで、考え方のぶれが少なくなると考えています。

まずは、森のカルテという聞き慣れない言葉を簡単に説明します。森のカルテとは、^{ぞうきばやし}雑木林の森などの動植物について調査した結果を記載する森の台帳を言います。カルテという言葉を使用したのは、森の所有者や森の近隣の方々などの多くの市民が、ご自身のために健康診断を受診するのと同じように森を大切にしていって欲しいという願いを込めたからです。また、医療の診断経過などを記録するカルテと同じように森を適正に管理していくという考えからでもあります。

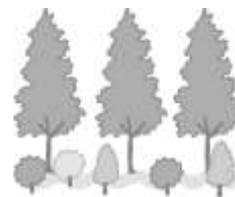
そのような森のカルテを市民の手でつくることの目的は、武蔵野の^{ふぜい}風情のある質の高い森をめざして森の環境と動植物の資源性を調査し、地域のみどり資源としていくことなのです。そして、そのような調査がきっかけとなって、地域のみなさんに育まれていく森の保全活動が広がっていくことを目的としているのです。

なお、この章以降の市民という言葉には、広い意味で市内にある事業者などの法人も含むことといたします。

2 大切なこと

市民による森のカルテづくりを行うにあたり、次の3つのことが大切と考えています。

- (1) 森を楽しむこと
- (2) 小平らしさを考えること
- (3) 時間をかけながら仲間と行うこと



(1) 森を楽しむこと

森の中や周辺で耳や目、鼻、手足、舌の五感のアンテナを研ぎ澄ませていくと、土の柔らかさ、新緑の木々の^{いぶき}息吹、森を抜ける風の音や用水路のせせらぎなどを感じることができます。そのような森の調査は、日常では見落としがちな自然から語りかけてくる情報を記録することもでき新鮮さを感じるかもしれません。統計的な数値を得る調査は、その信頼性や年次的な数値の比較などをするうえで重要なことですが、そのような調査とともに森を五感で体感していく調査も大切にしていきます。

森は四季折々の様々な顔を見せてくれます。新緑から落葉、色彩豊かな花たち、朝もやに^{きら}煌めく木もれ日、よく見ると鮮やかな昆虫たち、変化に富んだ鳥の羽模様など多彩な表情を見せてくれます。そのような地域の中で育まれてきた森を科学的な調査とともに体感しながら楽しんでいくことが大切なのです。

(2) 小平らしさを考えること

小平の森は、新田開発が始まった約350年前から引き継がれてきた歴史あるみどり資源なのです。そして、新田が開発された頃から、小平の森は、燃料や^{たいひ}堆肥などの資材供給、

建築用材の供給、防風などの目的があって守られてきたのです。そのような目的のために、クヌギやコナラなどの樹木が植樹され、何世紀にもわたって維持されてきた小平の雑木林の森は、結果として武蔵野の風情を感じる景観の要素となっていたのです。

現在では、必ずしも日常生活に不可欠なものとしての役割は失われつつありますが、自然と共生する都市環境・武蔵野の風情としての景観・防災時の緩衝帯や避難地などの「都市のみどり」としての役割が期待されています。

この市民による森のカルテづくりガイドブックは、特に減少が著しい雑木林の森を再生するために、武蔵野の風情がある森と市街地の中の森のあり方を検討しながら、地域で守り次代に継承していく重要な資源であることに気づくためのガイドであります。

(3) 時間をかけながら仲間と行うこと

森の成長には時間がかかります。また、雑木林のような人の手入れを必要とする森は、成長し続けることは難しく森の更新も必要となります。そして、これから行おうとしている市民による森のカルテづくりや保全活動といった森とお付き合いも、時間がかかり、成果がすぐ出ないことや、上手くいかないこともあると思います。やさしく長い目で見ていく継続可能な活動が求められます。そのような活動のために大切なことがいくつかあります。

まずは、一緒に活動していく仲間です。結果が共有できる仲間との活動は充実感があります。ここでは、森といった生きものが相手ですから、様々な価値観について話し合い一定の方向性を導き、実践し、結果を振り返りながら修正し、森と楽しくお付き合いしていくことが大切です。仲間がいればどのような結果も成果と思えます。

次に余裕が必要です。調査の専門性が全面に出過ぎても、高額な調査機器や作業機器に頼っても、また保全活動の危険な作業があり過ぎても大変です。市民が、身近な道具で知恵を絞って調査ができるような、「子どもに誘われたから、週末は一緒に行ってみようか。」といった感覚で気楽に来てもらいたいのです。余裕がないと早く終わって欲しくなり結果はいつでも良くなってしまいます。

更に、達成感が必要です。やはり、みどりが健やかに育つことや自分たちの活動が人に認められることにより達成感が生まれます。そのためには、ちょっとした成長や変化が仲間の中で共有できるような手法や仲間以外に発表する機会などを重視することが必要です。そのような調査活動では、あっという間に時間がたってしまうことでしょう。



3 どんなことやるの

市民による森のカルテづくりで具体的にどのようなことをやっていくのかを考えていく時に、調査の視点ということが大切になります。何を調査するにも、調査目的とその目的を達成するための調査手段が必要となります。その調査手段が、目的を達成するため、的を射たものとなるには、調査の視点をしっかりと持っていくことが大切なのです。具体的な調査方法は次

の章で説明しますので、ここでは調査の視点、つまり何のためにこの調査が必要なのかについて説明していきます。調査の視点としては、次の3つを考えています。

(1) 武蔵野の風情^{ふぜい}を考えていく

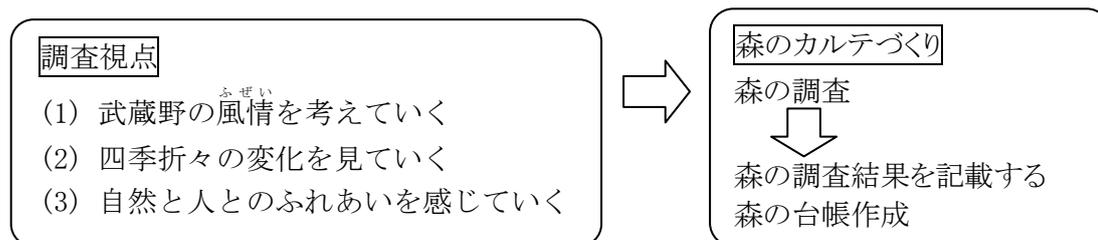
約350年前の小平の新田開発から、薪^{まき}の提供や防風などに利用できる有用な森として維持され、更新されてきた小平の雑木林^{ぞうきばやし}の森に学び、持続可能な森を追求していくことが大切です。そして、森の有益性が高まるように、森の歴史的な価値や自然環境的な価値などを発見する視点を大切にしていきます。

(2) 四季折々の変化を見ていく

四季折々の自然の姿は魅力的なものです。動植物の森との関わりを四季折々の特徴的な森の変化とともに記録していくことが、単調になりやすい調査を楽しくしてくれます。小平のように比較的小規模な森であっても、生物多様性に支えられた多様な森の変化があるといった視点を大切にしていきます。

(3) 自然と人とのふれあいを感じていく

人間の五感を中心とした自然とのふれあいを重視した体感型の調査や、森と人間の関わりが比較的強かった時代をご存じの方々の体験談など、地域の人たちへの丁寧な聞き取り調査も取り入れていきます。そのようなことにより、地域を再発見しながら、自然と人とのふれあいを重視していく視点を大切にしていきます。



4 どこでやるの

市民による森のカルテづくりの対象とする森は、小平市緑の保護と緑化の推進に関する条例第4条により市が指定した保存樹林や保存竹林などを考えています。これらのほとんどは、昭和48年（1973年）から昭和50年（1975年）に指定され、現在まで保全されてきたものです。そして、保存樹林などの指定がされる前から有益な森として育まれてきた雑木林^{はく}や屋敷林^{ぞうきばやし}の残存部^{やしきりん}なのです。このような歴史的経過のある森だからこそ、武蔵野の風情^{ふぜい}を感じることのできる森として再生することがふさわしいと思っています。

しかし、すべて保存樹林などを対象とすることを目標としながらも、市民による森のカルテづくりで重視していることが、森の環境と動植物の資源性を調査するとともに、地域で育まれる森の保全活動の契機とすることであることを考えねばなりません。そのような意味で、調査メンバーが身近な生活圏の中にある自分たちの森を再発見していくような「おらがまち」意識が大切だと考えています。つまり、「見たことがない人たちが、土日になると何回か森に入っていたようだ。」程度に市民による森のカルテづくりが認識されているようでは、すべての保存樹林などが調査されても次につながらないと考えています。

そこで、保存樹林や保存竹林などの中でも、地域性・ネットワーク性・森の樹木構成・周辺環境によりモデル地区を指定し、森の所有者の協力を得られるとともに、調査員が一定人数

確保された地域から実施し、その地域に根ざした調査の広がりや検証をしながら事業を進めていくことが実効性のある事業展開となるのではないかと考えています。

5 楽しさ^{もりもり}森²調査ってなんだろう

市民による森のカルテづくりをこれから行っていくにあたり、その中心とも言える森の調査について、市民に親しみをもって受け入れてもらえるよう愛称を考えました。名付けて「楽しさ^{もりもり}森²調査」としました。これは、森の調査をたくさんの仲間と楽しくやってくれるように、多さや気持ちの盛りあがりを示す「盛々」の言葉にかけて「森森」という字を当て「^{もりもり}森²」としたものです。

これから説明する第2章の具体的な調査内容と、ここまで説明したことをわかりやすくまとめると次の概念図のようになります。

